

弘大資料館 人類学・民俗学の企画展

弘前

弘前市文京町の弘前大学資料館で、企画展「ともに食ること・ともに食べることーアジア・アフリカ私たちの食」が開かれている。新型コロナウイルスの影響で、誰かと一緒に食事をしたり、会って話をする機会が少なくなっている中、集い食べる人々の姿を収めた写真から、人と会い、ともに食することの意味を改めて考える。3月16日まで。
(伊藤ほなみ)

集い食べる その意味は



集い食べる人々の写真などを展示している企画展

写真からコロナ後考える



16日から始まった展示は、同大人文社会科学部の葉山茂准教授らの企画。人類学・民俗学の研究者や学生らがフィールドワークで訪れた先で写した写真や集めた資料など約120点を展示している。アフリカに関する情報発信などに取り組むNPO法人「アフリック・アフリカ」も協力した。

中国雲南省の山岳地帯に暮らす少数民族「ハニ族」のコーナーでは、結婚式に集まった女性たちが肩を寄せ合ってごちそうを食べる姿や、日用品の調達のため街に下りてきた人々が余ったお金で宴会を楽しむ姿などを捉えた写真が並ぶ。

タンザニア、ガーナ、カメルーンなどアフリカの国々のコーナーでは、金属製の鍋や草を編んで作

日用品を買ったために下りてきた街の食堂で宴会を楽しむハニ族の人々(葉山准教授提供)

った水筒などの調理道具や現地の家庭料理のレシピも紹介している。

葉山准教授は「コロナ禍で、一緒にご飯を食べるといふ行為をしにくくなった今、みんなで集まって食べていた風景を見ることで、コロナ後にわれわれは何を大切にすべきなのか見えてくるのでは」と話した。

日曜、祝日、年末年始は休館。問い合わせは同館(電話0172-33432)へ。



ハニ族の結婚式で、ごちそうを食べる女性たち(葉山准教授提供)